様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年５月２０日現在

研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2007～2009
課題番号：19320140
研究課題名（和文）　映像に記録された女性像に関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）　Anthropological Studies for Image of Women recorded on Films

研究代表者
亘　純吉　（WATARI JUNKICHI）
駒沢女子大学・人文学部・教授
研究者番号：60099546

研究成果の概要（和文）：

本研究は、映像表現をコミュニケーション論の問題系ととらえ「映像に記録された女性像」を主題に文化人類学の視座から討究した。以下の成果を得た。

(1)生活改善運動を記録した映像資料を再考し、映像に描きだされた女性の社会進出の実像と虚像を社会的政治的構造の視点を加えて解明した。

(2)民族誌映像に表現されたジェンダー観を考察し、映像民族誌に関する理論と映像解析の方法を提唱した。

(3)女性を描いたアニメーション映像の普遍的理解と個別的理解の議論をとおして映像のグローバル化と民族性についての知見をえた。

研究成果の概要（英文）：

In this study, we consider that the visual image is one of the core issues of communication discussion and analyze “the image of woman recorded on videos and films” from the view of cultural anthropology. As a result, three points are revealed.

(1) We revealed the real and virtual images of women’s participation in public affairs by reexamining the visual materials that have recorded the Movement for the Improvement of Living in the post-World War II Era.

(2) We suggested the methodology to analyze the visual image and the theory of visual anthropology by considering how gender is treated in visual ethnography.

(3) We obtained the knowledge of globalization and ethnicity of visual images through the discussion of universal and individual understandings of the animation films that describes women.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成１９年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
平成２０年度	3,000,000	900,000	3,900,000
平成２１年度	2,600,000	780,000	3,380,000
年度			
年度			
総　計	9,000,000	2,700,000	11,700,000

研究分野：文化人類学
科研費の分科・細目：文化人類学　・　文化人類学･民俗学
キーワード：　文化人類学：女性像：生活改善運動：映像民族誌：映像のグローバル化：ジェンダー

１．研究開始当初の背景

映像人類学研究および民族誌映像をテキストとする文化人類学教育に関する論究は、その重要性が指摘されてはいるものの、日本映像民俗学の会（代表牛島巌）などで取り組みがなされているが、現状では個々人の研究者の対応にとどまっている。国外では、映像人類学は、カナダ、フランスなどで人類学の中で確固とした分野を占め、民族誌映画の制作に留まらず、民族誌映像の利活用をめぐる活発な理論的討論がなされている。女性人類学者（ワイナー）が監修した「トロブリアン島」、シャローティ・ポワイティ『アシャンテ族　市場の女』など映像民族誌では示唆に富む取り組みがなされている。また J. マーシャルらによる人類学ドキュメンタリー・センター（DER）で研究されたシークエンス･フィルムと映像解析の方法や、D.マクドーガルの観察映画に関する実践と理論などが高い評価を得ている。

２．研究の目的

本研究は、映像表現を、コミュニケーション論の問題系ととらえ、駒沢女子大学･人文学部･映像コミュニケーション学科の研究者を中心に体系的に討論するとともに、文化人類学の教育・研究面における活用法を構築することを目的とする。具体的には、「映像に記録された女性像」を素材として以下の問題系を明らかにする。

(1) 映像表現の虚像と実像（農村生活改善運動の映像にみる女性の地位と役割に係る実証的解析）（亘課題）

(2) 映像民族誌に関する理論と映像解析の方法（民族誌映像に表現されたジェンダー観の考察）（牛島課題）

(3) 映像のグローバル化と民族性（女性を描いたアニメーション映像の普遍的理解と個別的理解）（森田課題）

上記の課題をとおして、1)フィールドでの観察に近い映像記録の特性を生かし「理論的実証モード」から「物語モード」へのパラダイムシフトを可能とする民族誌映像とは何かを提示する。2)仮想世界を表現したアニメーション映像を研究の対象に加えることによって、グローバリゼーションと民族性に関する議論を深化させる。3)映像テキストの「現実表現」力は、問題の所在をインフォーマントと研究者が相互に検証することを可能する。この相互関係性

を重視した新しい文化人類学教育あり方を検討し、そのテキストを提供する。

３．研究の方法

(1) 映像表現の虚像と実像

戦後我国で展開された農村の生活改善運動の記録映画、啓発スライドを根本資料に、女性の社会進出と社会的役割について個別的関係性・相互作用に視点を置いた実証的解析を行う。映像で表現された女性像に内包される作られたモデルとフィルムの背景に潜む不整合の分析に焦点が絞られ、「理論的実証モード」から「物語モード」へのパラダイムシフトを可能とする映像作品のあり方を映像人類学および開発人類学の視点から考察する。

(2) 映像民族誌に関する理論と映像解析の方法

民族誌映像に表現された女性像の考察である。観念的な表現意図よりは出来事の構造が重視される観察映画やシークエンス・フィルムといった民族誌映画の手法の検討をとおし、フィールドでの観察に近い映像記録法の特性を利用し、「現実を説明する」記述を超えた、「現実を表現する」手法を提示する。ジェンダー研究に資する外国の民族誌映像をテキスト（「マサイの女」など）として取り上げ、ジェンダー論の再編を試みる。

(3) 映像のグローバル化と民族性

日本とチェコのアニメーション作品に見られる女性像の表現をとおして、グローバリゼーションと民族性に係わる議論を比較芸術論視点から深化させる。

４．研究成果

「映像に記録された女性像」をテーマに以下の問題系を明らかにし、文化人類学、開発学、女性学、比較芸術学の教育研究に寄与する研究成果と資料の提供がなされた。

(1)　映像表現の虚像と実像：農村生活改善運動の映像にみる女性の地位と役割に係る実証的解析を試みる課題。

戦後行われた農村の生活改善運動は、多くがその過程で台所における生活の技術の合理化、またその実現に向けた自己主張などをとおして、農村社会の伝統的な思考の枠組みを再編する機会であった。この運動を記録した映画（『窓ひらく』（1958）など）や啓発用スライド（『新生活モデル町村：一色部落のくらしの事例』など）は、伝統／封建的因習に縛られた生活態度が、前近代的な生活環境に住民を押し止めている、という認識のもとにストーリーが展開されている。すなわち、伝統／封建的因習に縛られた生活態度こそが、民主的な組織運営の未発達、機能不全、そして近代的あるいは合理的な思考を生活改善に取り組む積極性や知識の不足を招いていると説いた。前近代的な生活態度＝貧困という図式で状況をとらえ、この状況を打開するためには、個々の農民が主体的に物事に対応できる能力を相互の啓発によって高め、農民自身の生活の改善に寄与することが強調された。

運動は改良カマドなどの具体的な物を作り上げるという経験をとおして、家庭内における女性の発言力と地位を高め、新たな価値観で結ばれた組織が生みだす共同の力を体験した。しかし、この運動は、農村や山村の貧困の生みだしている社会的政治的な構造に目を向けるにはいたらなかった。運動を推進した啓発映画やスライド、あるいは活動そのものを記録した映画は、近代合理の理念を背景に制作されているが、人びとが置かれていた社会的政治的な構造を映像表現に盛り込むことが多くの作品ではできなかった。な

ぜなら農村が都市の周縁部におかれている現状や貧困から脱却できない現状を認識し社会変革に向けた思想的な解放をこの運動自体に内包していなかったからである。したがって運動が農村を変える大きな社会大衆的運動としての発展性を持たなかった。それはこの運動の基層に行政が深く係わっていたこともも関係し、生活改善運動の限界でもあった。この議論をとおして、開発学における住民参加型の開発のファシリテーション手法として評価されている戦後の生活改善運動は、当該集落の社会的、政治的階層を含めた社会変容として再考する必要性があることも指摘した。

(2)　映像民族誌に関する理論と映像解析の方法：民族誌映像に表現されたジェンダー観を議論する課題。

出来事の構造と自ら語る人物を重視する観察映画やシークエンス・フィルムといった民族誌映画の手法で表現された作品について、女性と民族文化の視点から検討を加えた。フィールドでの観察に近い映像記録の特性を生かし、「現実を説明する」記述を超え「現実を表現する」こととは何かをとおして映像民族誌に係わる理論を考察した。これと並行して外国作品にテロップをつけ、異文化理解教育に広く利用できる映像資料の作成と検証も行った。映像の解析を行った主要作品は、以下のとおりである。

① 映像理解に関する意識

人類学者リンダ・コナーと映像作家チムとパティ・アシュが 1980 年代にインドネシアバリ島の女性霊媒師について記録した５部作 *Balinese Trance Séance*（1980）、*Jero on Jero: A Balinese Trance Séance Observed*（1981）、*The Medium is the Masseuse: A Balinese Massage*（1981）、*Jero Tapakan: Stories from the Life of a Balinese Healer*（1983）、*Releasing the Sprits : A Village Cremation in Bali*（1991）をテキストとして用い、映像を撮る側、撮られる側、見る側で生じる映像理解に関する意識のズレを検証し、女性祈祷師に対するバリ社会の期待をジェンダー論と映像人類学の視点で議論した。

② ジェンダー論のパラダイム

R. ガードナーは､1973 年に *Rivers of Sand* を制作し、ハマー族のジェンダー関係を、自惚れた怠情な男性に対する従順な働きすぎの下僕として女性として描いた。この映画は 1970 年以来ハマー族調査を継続しているドイツ人の人類学者ジェーン・リダル夫妻の協力のもと制作された。しかし彼女は *Rivers of Sand* の女性の表現に不満であった。不満を胸にした彼女は 1989 年から BBC テレビの企画に参画し *The Hamar Trilogy* を続いて 2001 年に *Duka’s Dilemma* を制作した。これらハマー族の女性を描いた作品は、出来事の構造と自ら語る人物を重視する観察映画の手法をとり、*Rivers of Sand* とは異なる表現で女性の視点から女性の社会的地位と役割を描きだした。その映像記録は精緻で出来事の構造に迫る主人公の会話をみごとに引きだしている。

③ 映像表現とジェンダー

メリッサ・ディービス制作の *Masai Women*(1974)、*Diary of a Massai Village*(５部）(1985)そして *The Women’s Olamal: The Organization of a Massai Fertility Ceremony* をテキストした表題の取り組み。本課題では、まず女の生涯（少女―割礼―嫁入り―息子の成人）を描いた *Masai Women* の映像解析と検討を行った。この映像は、説明的な語りに終始し、人類学者の頭の中で作られた考えで構成されている。インフォーマルな会話はほとんど見られず、選択されたインタ

ビューで、しかも社会慣習の解釈が主題であり、女性人類学者が経験し、記述した女の世界である。ジェンダー構造がどう働くかが焦点で、日常の生活でどう作用しているかではない。女性の従属的立場も、神話で説明させている。つまり、理念と実際のずれは、描かれていないことを指摘した。つぎに『*The Women's Olamal* は、４年ごとに行われる妊娠・出産を祝福する儀礼が構成される過程を追った作品である。ジェンダー関係の抽象的な議論を乗り越えて、儀礼をめぐるマサイ社会のダイナミックな局面が描かれている。儀礼を巡るドラマは、マサイ社会に対する新しい見解を示す。構造からプロセスへと、事象そのもののドキュメントとなっている。そして、ダイレクト・シネマの技法を用いて、集合力として女性の動員力が描かれる。その女性の抵抗クライマックスを、集合感情の爆発に置く。慣用的な表示を乗り越えた女性の経験という問題に、新しい見地を示しえた作品である。ジェンダーを巡る論議は、構造的な問題だけではなく、感情が内包されことが示される。しかし、懐妊儀礼の遂行によって、男女の慣例的序列の関係は、回復される。映像は、女性たちと年長者の苛烈な闘争を描き、社会の基本的な緊張を示す。

(3)　映像のグローバル化と民族性：　女性を描いたアニメーション映像の普遍的理解と個別的理解を主題とした課題。

アニメーションは、制作者によってデェフォルメされ象徴的に表現されるが、その制作過程で民族的美意識や認識が強く反映することを、比較芸術論の立場から検討した。日本とチェコソロバキアの人形アニメーションで表現される女性イメージをテーマにチェコソロバキアの作家ヘルミーナ・ティールロヴァー、ガリク・セコ、ブジェチスラフ・ポヤル、イジー・トルンカと日本の川本喜八郎の作品をテキストに比較研究を進め以下のような成果をえた。

ティールロヴァーの作品『ミーチェク・フリーチェク』(1956) は、登場するキャラクターたちそのものをとおし、女性の本質的な原理である母子の関係をとりあげ、それは必ず愛という絆で結ばれるという表現に収束することを指摘した。ガリク・セコの作品『サボテンさん、ちょっと』(1986) における女性表現には日本人作家川本喜八郎の描くような情念的な側面はなく「性」そのものを肯定的に表現している。ブジェチスラフ・ポヤルの作品『ロマンス』(1963) は、たわい無い失恋物語であるが、作品が制作された時代チェコソロバキアはまだ旧ソ連の統治下にあり、作家はチェコソロバキアの女性像をかりて、作家自身の思想性を投影している。この物語の結末に用意される愛の裏切りは、体制下の中で、作家＝市民の無力性が女性像をとおして比喩的に表現されている。イジー・トルンカの『手』(1965) は、女性と男性が演じる手が一般市民を象徴している作品である。象徴主義的表現は意味を強要し、鑑賞者が作品の中に浸る自由を許さない。一般的には解釈しやすい表現にはなるのだろうが、抽象芸術とは真逆のベクトルを持たざるを得ない。象徴主義的表現手法は、ある意味においてそれはマニエリスムに行きつき、作家にとっては自殺行為ともなりかねない要素を含む。しかし、この時代の政治的抑圧に抗するために、あえて象徴主義的表現すなわち意味の強要という毒をもって挑んだ。この毒は強制的ドグマを持つという意味において政治的抑圧と同質である。そこに当時の体制下においてトルンカの成すことのできるささやかな抵抗を読みとった。彼にとって民族的であるとは、政治的であることと同義であった。そしてさらに、民族としての存在が危

機にさらされたと感じたとき、人の行動は本能に支配される。つまりこの時代に作家が表現した女性像の本質は民族の生存そのものに関わる思想性があった。

川本喜八郎は、『鬼』(1972)、『道成寺』(1976) など、日本の古典をテーマにした作品を主に制作する。それらは情念の物語であり、ここに登場する女性はどちらも狂気の中に生きている。かつてチェコソロバキアでの制作経験をもつ川本にトルンカは「あくまでも表現の本質は民族的であるべきなのである」語っている。外国作品の中に表現された「日本」に見るように、外国を表現するために、たとえその土地において制作をしようが、異邦人にその国を表現することは決して出来ない。またそれをすること自体無意味なのである。作者の民族性は、好むと好まざるとに関わらず作品に表出する。

以上の議論を踏まえると、女性の表現のグローバリゼーションは、民族性の対極に位置するもので、幻想でもある。表現上の構造／形態において意味のある不連続は存在しない。民族性とは表層に描かれた映像表現のみではない。映像の民族性とは時代性、社会性、政治性などが重層的に重なり相互に関係し合う民族の生存そのものの表現である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計２件)

牛島　巌,「ジョン･マーシャルの映像民族誌Ⅱ： A Kalahari Family」『駒沢女子大学 研究紀要』査読無 14：pp.49-71.(2008)

牛島　巌,「エチオピア南部ハマー族の女性を描く映像におけるジェンダー表現」『映像民俗学』査読無 7: 38－70.(2009)

〔学会発表〕(計３件)

亘　純吉,「記録の方法･利用の方法：映像授業」『映像民俗学の会 第 30 回 研究会』2008.3.22, 沖縄大学.

牛島　巌,

「記録の方法･利用の方法：シークエンス映画」『映像民俗学の会 第 30 回 研究会』2008.3.22, 沖縄大学.

〔図書〕計 0件)

〔その他〕

ホームページ等

○ http://www.komajo.net/

○ 生活改善運動関係映像資料集(試作版、制作：亘　純吉)

・『生活改善運動映像資料集１：貧困と向かいあった日々』(2007) など６タイトル

○文化人類学での利用をめざした映像民族誌集（試作版、日本語翻訳：牛島　巌)

・*Duka ‘s　Dilemma*(2001)など６タイトル

○研究の成果を反映させたアニメーション作品の制作・監督：森田　和夫

・『新日本風土記―出雲篇』コーナータイトルアニメーションNHK BS HiVision （全24本）(2010.3 放映)

６．研究組織

(1)研究代表者

亘　純吉（WATARI JUNKICHI）

駒沢女子大学・人文学部・教授

研究者番号：60099546

(2)研究分担者

森田　和夫（MORITA KAZUO）

駒沢女子大学・人文学部・教授

研究者番号：00350520

(3) 連携研究者

牛島　巌（USHIJIMA IWAO）

駒沢女子大学・人文学部・教授

研究者番号：10091886

（H21 年度より）